

酷暑が続きます。みなさまご自愛ください。今号から、新企画
「富安陽子 腕だめし STORY COMPE.2025」がスタートです。
現在会員登録数 4,437 人さま。次号は 8 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

《6》富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

■-----■
【1】お知らせ

●オンライン講座「2024年に出版された子どもの本から」申込受付中
講師：土居安子（大阪国際児童文学振興財団 総括専門員）

◇リアルタイム参加（Zoom）7月25日（金）10:30～15:00 休憩あり
質疑応答の時間あり。録画配信も視聴可。 定員60人、参加費1000円

※お申し込みは Peatix から <https://2024kodomonohon-1.peatix.com/>

◇録画配信 8月8日（金）～12月15日（月） 視聴料1000円

※お申し込みは Peatix から <https://2024kodomonohon-2.peatix.com/>

●新しい報告集ができました

『2024年度国際交流事業報告集 国際講演会「アメリカの絵本作家 ウォルター・ウィック自作を語る」／子ども向けワークショップ「鏡をつかってチャレンジミッケ！」』 2025年6月発行 1100円（税込）

http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/05_publication/index.html#hanbai

●「ご寄付をお願いします」

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

■-----■
【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『南の島のティオ 1』 池澤夏樹/著 ウノサワケイスケ/画 岩崎書店
2025年6月 対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストは当財団理事の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：小さな南の島でホテルを経営する父と暮らす 12 歳のティオのちょっと不思議な体験を描いた連作集。全 3 巻の第 1 巻。ピップさんという人が、とても高い値段で、ホテルの名前入り絵はがきを売りに来る。その絵はがきを客が買って送ると、送られた人は必ず島にやってくるという不思議が起こる（「絵はがき屋さん」）。父を含む十隻のモーターボートが海に標識を作って試走すると、海に迷わされて不思議を見たり（「草色の空への水路」）、大きな流木を見つけたアサコさんが毎年 20 ドル払ってとりにくるまで見守っておいてほしいと、島のヘーハチロさんに依頼したり（「昔、天を支えていた木」）、カマイ婆に「落ちるぞ」と予言されたお金の亡者の男が、予言通りになる事件が起こったりする（「地球に引っぱられた男」）。雑誌『飛ぶ教室』などに掲載されたあと、楡出版（1992 年）、文春文庫（1996 年）、文春文庫増補版（2010 年）、講談社青い鳥文庫（2012 年）などで出版されている。

T：南の島で起きる「不思議」が魅力的で、味わい深い作品です。

Y：淡々として静けさを感じる文章は、行間をたっぷり読ませてくれて、島に打ち寄せる波のように感じました。

T：感情的ではなく、散文的なティオの語りによって、父や島に住むカマイ婆、ホテルの客人などの人物が浮かび上がります。他では読めないような文章だと思いました。

Y：文春文庫版の『南の島のティオ』の巻末には読み応えのある神沢利子さんの「解説」があって、ミクロネシアのポナペ島が物語の舞台だと書かれています。

T：日本人の読者の日常とかけ離れた場所が舞台になっているからこそ、不思議な世界が描けたのだと思いました。

Y：非日常を描いてはいますが、そこには戦争の影があります。「戦争中、まだこの島が日本の領土だったころに生まれたから、父親が日本の偉い人の名前を付けた」というヘーハチロさんがいます。

また、メッセージとしてではなく、物語として、自然とともに暮らすことや、伝承の魅力、文化の継承の大切さについても書かれています。

T：「草色の空への水路」や「地球に引っぱられた男」を読むと、自然の持っている計り知れない力を感じます。

この本の底本は、文春文庫増補版（2010 年）とのことですが、3 巻本にするにあたって、目次が組み直されていて、それぞれの巻がまとまりを持って読める工夫がされています。

Y：今回の本は挿絵もたっぷりついていて、海や島の自然の美しさが感じられ、不思議が起こる舞台が想像できます。

T：冒頭の「絵はがき屋さん」でティオは、絵はがき屋さんに写真を 1 枚とってもらって、絵はがきにしてもらい、「それを受け取った人はなにがなんでもきみに会いにくる。一中略一だから、きみが大人になった時にどうしても好きな人ができて、来てほしいと思ったら、投函すればいい。きっと役に立つ時が来るよ」と言います。このエピソードがあることで、読者はティオが大人になっていく様子を想像します。うまいなあと思いました。

Y：ちょっと予言みたいですね。この絵はがきを使うときが来るんだろうか。使うとしたらどういう時なんだろう。ティオはホテルを継ぐんだろうか。それとも島の外で生きるんだろうかと、このエピソードによっていろいろ考えてしまいました。

T：2 巻以降も楽しみです。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第119回「うろこ雲」

小人の登場する物語

〈そらいちめんに青白いうろこ雲が浮かび月はその一切れに入って鈍い虹を掲げる。〉

賢治の初期短篇の一つ、「うろこ雲」はこのように書き出されます。月光が雲にかかり、虹のように見える現象は「月暈」(つきがさ、げつうん)と呼ばれ、白虹とも言うそうです。

その鈍い虹が雲の合間に見える夜、〈私〉はすっかり戸が閉められ、ひっそりとした通りをひとり歩いています。〈私〉の目に映るのは、月光の底を馳けて来て尾を振る小さな犬や、〈北上岸の製板所の立て並べられた板の前を〉ふいと歩く小さな男。つめくさの原では、小さな甲虫が〈私〉の額に突きあたり、ひよろひよろしながらも飛んでいきます。

原の向こうから、これを見ていたのは〈銀の小人〉です。横目でこちらを見、そしてにやにや笑いながら即興の歌をうたいます。

「なんばん鉄のかぶとむし／月のあかりも つめくさの／
ともすあかりも 眼に入らず／草のにほひをとび截って／
ひとのひたひに突きあたり／あわててよろよろ／
落ちるをやっとふみとまり／いそいでかぢを立てなほし／
月のあかりも つめくさの／ともすあかりも眼に入らず／
途方もない方に 飛んで行く。」

やがて、原の向こうに小人は消えますが、〈小学校の窓ガラスがさびしく光りひるま算術に立たされた子供の小さな執念が可愛い黒い幽霊になってじっと窓から外を眺めて〉いるところで、物語は終わります。

「うろこ雲」といえば秋を連想しますが、爪草や綿雲(積雲)では春を感じます。春寒の夜、硬質の鈍い光が降り注ぐなかで語られる、どこか幻想的なお話です。ところで、小さな犬に、小さな男、そして小さな甲虫。銀の小人や、小学校にいる子どもも含め、〈私〉の眼を通して語られるのは、すべて「小」を纏う者たちです。「小」に宿る不可思議な霊性を、〈小人〉や〈幽霊〉として描きだしているようにも見えます。

賢治は、コロボックルや goblin (ゴブリン) など、アイヌやケルトの小人をしばしば作品に登場させていました。風の三郎(「風の又三郎」)や座敷童子(「ざしき童子のはなし」)を含め、東北に伝承される怪異を身近に感じとっていたからかもしれません。(ペ吉)

(本文の引用は、ちくま文庫『宮沢賢治全集8』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 73

族の長が水面をまたも叩くと、その音は霧の向こうの岸壁にこだました。それを合図にあざらしたちは、もぐったり宙返りをしたり、ボートをはさんでしきりに追いかけてこをしたりしはじめたので、静かだった港内はさかんな水しぶきが上がり、大波小波でごった返した。フィオナの乗っていたボートはロープに繋がってはいるものの、激しい上下動に両縁にしっかりつかまっていなくてはならなかった。波がボートの縁にぶつかるたびに、古い船体はぎいぎい音を立てたけれど、フィオナはあざらしたちのみごとな水の舞に見とれていて、気にならなかった。

(『フィオナの海』 ロザリー・K・フライ/著 矢川澄子/訳 集英社 1996年6月 p.90)

1957年に「Child of the Western Isles」として刊行されました。主人公の少女フィオナがスコットランドの町から健康を害して祖父母の住む島へ一人で旅する場面から作品は始まります。祖父母もフィオナの家族も元は、ロン・モル島に住んでいましたが、今ではロン・モル島は無人島になっています。

フィオナには、ジェイミーという赤ん坊の弟がいましたが、ロン・モル島を離れるとき、木のゆりかごもろともカモメに連れ去られてしまい、それ以来、行方不明になっていました。フィオナのおばあさんは、フィオナに、祖先にセルキー（訳者解説注：ケルトの民間伝承に出てくる妖精たちのうちのあざらし族）の女性がいて、ときたま、その人にそっくりの「真っ黒い髪と不思議な黒い瞳をした子供が「生まれる」と言います。そしてジェイミーこそ、黒い髪と黒い瞳の子どもでした。

フィオナは、ジェイミーを見つけることを決意しており、ロン・モル島へ行き、あざらしに近づこうとします。引用の場面は、祖父母のいる島の岸壁であざらしたちに出会った場面です。あざらしの動きが魅力的で、フィオナが夢中になっている様子が目に浮かびます。このあと、ボートは、フィオナが気づかない間にロープが解けて、海に流されていきました。あざらしたちはフィオナをロン・モル島へ誘い、そこで、フィオナはジェイミーを見かけます。

島を捨て、町に住み、工場で働く父や兄姉とは違って、ロン・モル島へ戻って生きる選択をするフィオナやフィオナのいとこのローリー、そして祖父母が今号のメルマガ対談に掲載されている『南の島のティオ』と重なるところがあるように思いました。(Y)

《4》 行って来ました！

神戸ファッション美術館で8月31日まで開催されている「星をみつめておめでとう さとうわきこ展」に行ってきました。絵本作家さとうわきこの絵本の原画、童話の原稿や挿絵、詩作ノート、ダミー本、未発表作品の草稿、立体作品など200点以上が展示されていました。

全体は、2024年3月に89歳で亡くなってから出版された最後の絵本『みちくさ』（偕成社 2024年5月）の原画を展示した、序章「みちくさ」に始まり、絵本作家になるきっかけがわかる第1章「はじまりのこと」、生い立ちを知ることができる第2章「母のこと、父のこと」と第3章「わたしのこと」、第4章「ばばあちゃんのこと」、第5章「いろんな人とのこと」、終章「夢のつづき」という構成でした。

生い立ちの解説を読みながら、お父さんが10歳で亡くなったこと、それ以降お母さんが一人で育ててくれたことが作品にも大きく影響していることがわかりました。また、そういう家庭環境で育ったからか、さとうさんがとても自立した女性だったことがうかがわれました。

第1章には、『キンダーブック』や『チャイルドブックゴールド』『いちごえほん』などの雑誌の絵も展示されており、さまざまな手法を模索していたことがわかります。そんな中で、38歳のとき、『わっこおぼちゃんのとと5のえほん』（いかだ社 1973年）と「おつかい」（福音館書店 1974年5月）が出版され、「やっと絵本作家として認められた」（解説より）と感じたと書かれていました。長年かけて、ソフトかつカラフルな色合いや、ストーリーの最後のオチの楽しさなど、さとうわきこスタイルが作られていったのだと思いました。

第2章には、お母さんがモデルだという「せんたくかあちゃん」シリーズの原画が展示されていました。何でも洗い、力持ちのかあちゃんは、まさに地に足がついたたくましい女性です。はりめぐらせたものほしなわにいっぱいの洗濯物が干されている絵（はだかの子どもも干されています）は、圧巻です。

そして第4章の「ばばばあちゃん」シリーズの絵は、絵本を思い出しながら見ていきました。必ずネコや犬がそばにいてばばばあちゃんを応援してくれるのが心強く感じます。亡くなる前日まで描いていた絵は「ばばばあちゃん」と動物たちの絵。最後まで明るくて元気なばばばあちゃんがさとうさんの中に住んでいたんだなと思いました。（K）

神戸ファッション美術館 <https://www.fashionmuseum.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第21回

第5章 古田足日先生

その3 社会にひらく「散文」（上の前半）

昨年（2024年）は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』（童心社 1974年）の刊行50周年でした。私が古田足日先生（1927～2014年）に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

《6》 富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025

「日産 童話と絵本のグランプリ」の休止を受け、私たち IICLO は再開を待つ間、何かできないだろうかと考えました。

その結果、みなさんに、童話を「創る場」と、童話を「読む場」を提供しようと思ひ立ちました。

●童話を「創る場」

これは、子どもを対象とした自作の童話を応募してもらう創作練習の場です。創作の練習ですから、応募者全員に同じ条件で、腕を磨き、腕を競ってもらえるよう作品募集には条件を設けます。

- ①まず、原稿用紙5枚以上10枚以内という枚数の制限。5枚以上であれば、何枚で仕上げても構いませんが、1文字でも10枚をオーバーした作品はアウトです。
- ②物語の中に、定められた2つのキーワードを必ず入れること。全員が同じキーワードを使わなくてはならないという制限の中、どれだけ他作品と違う独自性のある物語を創れるかというところが腕のみせどころです。
- ◎ 今回のキーワードは・・・「アイスクリーム」「かぼん」
- ③出版経験の有無は問いませんが、もちろん、未発表の作品に限ります。

●童話を「読む場」

これは応募いただいた作品を公開し、みなさんに読んでもらう場です。この公開にも条件を設けます。

- ①全ての応募作を公開することはできませんので、面白かった作品5～6点を選んで、当財団ホームページ上で誰にでも読んでもらえるようにします。
- ②読んだ人は、“これが一番面白い！”と思う作品に投票することができます。ただし投票できるのは1点だけ。複数に票を入れることはできません。
- ③公開の際には、投票に影響が出ないように、作者名をはじめ、書き手の情報は一切伏せられます。作品だけを読んでじっくり味わって、あなたのナンバー1を選んでください。
- ④投票期間の後、集計が終わったらナンバー1とナンバー2の作品を発表します。この時初めて作者が明かされます。この2作については、富安陽子がコメントを述べさせていただきます。(作者名は匿名やペンネームでもOKです)

●このコンペには、賞金や出版といったメリットはありません。でも皆で物語を書く面白さと、物語を読む楽しさを共有できればと思います。そして子どもの本の書き手を目指す人たちの切磋琢磨の場になるように、私、富安陽子も応募者のみなさんと全く同じ条件(10枚以内、キーワード2つ)で新しい物語を一本書きあげます。上位2作品の発表といっしょに、私の物語も参考作品として公開しますので、そちらもあわせてお楽しみください。

さあ！物語を書きましょう！

みなさんの生み出す作品と出逢うのを楽しみに待っています！

*尚、これは IICLO にとっても初めての試みですので第1回の実施結果をもとに2回目以降は内容や方法に変更があるかもしれないことをお断りしておきます。

富安陽子

◇第1回の募集期間：7月23日(水)～8月31日(日)

<詳細、応募方法はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html

●「大阪国際児童文学館を育てる会」2025年度総会記念行事
講演会「放送100年ー子どものための人気番組をめぐってー」
講師：畠山兆子（前育てる会常任委員長、梅花女子大学名誉教授）
日時：8月17日（日）13：30～16：30 ※有料、要申し込み
場所：ドーンセンター〔大阪市〕
主催：大阪国際児童文学館を育てる会
後援：大阪府子ども文庫連絡会、大阪国際児童文学振興財団

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『南の島のティオ 1』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は8月12日（火）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

日本で唯一の貸切モノレールでのおはなし会、そして終着駅での人形劇。乗り物好きの子どもたちにも大人気のイベント「おはなしモノレール」の打ち合わせに行っていました。今年は10月開催の予定です。詳細は9月のメルマガジンでお知らせします。楽しいイベントにすべく、IICLOのスタッフ一同がんばります。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメルマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp